

パ ラ レ ル ワ ー ル ド

第 2 回

世の中の多くの人々は何が起こったのかをほぼ把握していた。

テレビや新聞・雑誌などのマスコミでもネットでも、連日膨大な量の情報が流されていたのだから、それは不思議なことでもなんでもない。特に被災地から離れた地域の人間にとって、それはブラウン管や紙面の向こうの世界の話なので、客観的に全体を把握することができた。現場から遠く離れた者が現場をよりよく知っていたのだ。

被災地では全く逆のことが起きていた。

被災者の多くはいつたい何が起こったのか把握できていなかった。

わかっていたのは、強い揺れの後、大量の水と土砂が街を襲ったことだった。住民の多くは狐きつねにつままれた心持だった。この街は海から遠く離れた内陸部にあり、津波は決して来ないはずだった。地震が終わったとき、かなり建物は倒壊したが、

倒壊を免れた家の住人たちはとりあえず胸を撫なで下ろおしていた。もちろん、家を失った人々は気の毒だったが、とりあえずは自分と家族の安全を優先しなくてはならない。そう思うのは人情の上でも仕方がないことだった。

そんなとき、市の放送が流れた。

内容を聞き取れた者は僅わずかだった。スピーカーの音は平時でもあまりよくは聞こえない。その上、大雨の中だったので、微かすかに避難関係の情報を流しているというのがわかった程度だった。

そして、殆どほとんどの住人は自分には関係のないことだと思った。

地震の後、津波が発生することがあるのは知っている。また、山間部では土砂災害が発生することも。だが、この街は海からは随分遠い。百キロは離れていないにしてもそれに近いぐらいの距離だろう。そして、市街地の大部分は平地だ。近年やますそは山裾やますそに多少の住宅地が開発されているが、それは主流ではない。広がりきった街が最後に行き場がなくなり、山の斜面を少しだけ登ってみた。そ

んな感じだった。

もちろん、事態を察知した人々も少数ながらいた。なんとか市の放送を聞きとったり、ネットの情報を見たりしてダムが決壊を知った彼らの行動には、驚くべきことに様々なパターンが存在した。

ある者たちは家に残ることを決心した。ダムが決壊したのなら大量の水が流れてくるだろうが、所詮はしょせんダムの水だ。津波程ではあるまい。ダムの水がなくなれば終了だ。それまで外に出ずに、この家の中でやり過ごせばいいんだ、と思った者たち。そして、気付くのがあまりに遅く、もはや逃げられないと悟った者たち。彼らは家の中で水流が来るのをじっと待っていた。

ある者たちは外に飛び出すと、いっせいに下流に向かって逃げ出した。水は上流から来る。だとしたら、下流に逃げるしかあり得ないだろう、という考えだ。

そして、川の流れとは垂直な方向に逃げる者たちもいた。街は所謂いわゆる谷底低地の上に立っている。つまり、川の両側には、小高い山地が連なってい

るのだ。津波からの避難が高所を目指すことを鉄則としているように、ダム災害でも高所を目指すのが最上の策のように思えたのだ。

結果、家の中に残った者たちはよほど運がよくない限り、助からなかった。土砂を含む水は住宅の二階部分をすっぽりと沈めてしまう程の高さだったのだ。

川下に向かった者たちもほぼ全滅に近かった。迫りくる水を背にして走るというのは無謀なことだった。水の速度は人間の足の速さでは決して逃げることのできるものではなかった。

高所に逃げた者たちが助かる可能性が最も高かった。ただし、それはあくまで結果論であって、助かった者たちが常に正しい選択をしたとは限らない。現にダムからの距離が短い地域の住民たちには、高所に逃げ切る程の余裕はなかった。必死で逃げている途中、突然横からの土石流に曝さらされることになった。

あり得ないような大災害が起きた原因は二種類の自然災害が同時に起きたことにあった。爆弾低

気圧により形成された線状降水帯がこの地域に居座り、発生した集中豪雨が大量の水をこの水系に供給し続けた。結果として、ダムは満水状態になり、^{すさ}凄まじい水圧が堤体に掛かることとなった。もちろん、満水になったからといって、ダムが決壊することなどあり得ない。

だが、そのとき、想定外の事態が起きた。この地方をマグニチュード七・二の巨大な活断層型地震が襲ったのだ。最大震度は六強で最大級の揺れではなかったが、その範囲に市街地が多く存在したため、被害は甚大なものとなった。

さらに、人々が予想していなかった場所で、誰^{だれ}も経験したことのない巨大災害が発生した。地震の揺れで、ダムを固定していた岩盤にずれが生じたのだ。それは僅か数十センチのものだったが、老朽化したコンクリートは応力に耐えきれず、亀^き裂を生じた。いったん亀裂が発生すると、水圧の負荷はいつきにそこに集中する。ほんの数秒でダムは崩壊した。

湖の端が突然なくなった状態となり、二千万ト

ン以上の水が野放しとなった。

水はダムの下流の谷を埋め尽くしながら、木々や岩石を巻き込み、凶暴な土石流へと変貌をとげ、そのまま市街地へと侵略を開始した。

地震で倒壊した家も倒壊を免れた家も次々と怒濤に取り込まれ、水流はさらに危険なものになった。

人々は水に飲まれ、溺れ、そして瓦礫や岩石に碎かれ、磨り潰された。

家族はばらばらになり、遠くへと押し流された。ダム湖の水量には限りがあるため、洪水のピークはほんの数時間で過ぎ去り、無残に破壊された街が水の中から浮かび上がった。

家も車も人も全てが破壊され、がらくたのように放置されていた。全てを失った人々は現実を理解することができず、ただただ立ち尽くすしかなかった。

良平もまた変わり果てた加奈子の前で呆然として続けていた。

なんとということだ。加奈子が死んでしまった。

何もかもがどうでもよくなってしまった。きっと、もう俺おれにはいいことなんか何一つ起こらないだろう。仮に起こったとしても、そこには加奈子はもういない。だったら、それにどんな意味があるだろう。

このままここで、加奈子と一緒に眠ってしまいたい。

良平は裕彦ひろひこをその場に降ろし、目を瞑つぶった。

だが、何かが悪平の意思を阻んだ。

この音は何だ？

良平は目を見開いた。

二人の頭の上からぼたぼたと滴が垂れ、ぎしぎしと不気味な音を立てながら木の滓かすのようなものが降ってきた。

ここにいるのは危険だ。

ぼんやりとした意識の中で何かひらめが閃いた。

ゆっくりと見上げた。

天井だった部分に無数の穴が開き、そこから空の光が入り込んでいた。その明るい穴がいつせいに動き、位置を変え始めている。

良平は何が起ころうとしているのかを必死に推測しようとした。

家が倒壊しようとしている。

加奈子の手を握った。すっかり冷たくなっている。

このままここでじっとしていれば、加奈子と眠り続けることができる。

良平は安らかな心になった。

そして、そのとき、すぐ横で裕彦が泣いているのに気付いた。

そう。裕彦だ。この子は生きなければならぬ。

良平は自らの意識をはっきりと覚醒かくせいさせるため、血が出るまで唇を噛み締めた。

「裕彦、お家うちから出るぞ！ お父さんに掴つかまれ！」
だが、裕彦は泣くばかりで、良平に掴つかまろうとはしなかった。

ぎしぎしという音がばりばりという音に変わってきた。大きな木材がばたんばたと近くで倒れ始めているようだ。

良平は裕彦の手を掴んだ。「さあ。行くよ」

裕彦は動こうとせず、泣きながら加奈子を指差した。

「お母さんはもう……」

ああ。五歳の子にどう言えればいいんだ？

「お母さんは後で出るから、まずヒロ君が先に出よう。順番だよ」

だが、裕彦は動かず母親を見詰めていた。

「言うことを聞くんのだ！」良平はつい怒鳴り付けてしまった。

裕彦はびくりとして、さらに激しく泣き出した。落ち着け。まず自分が落ち着くんのだ。

良平は深呼吸をした。

五歳の子に状況を理解しろと言っても無理だ。

裕彦を説得している余裕はない。今にもこの家の残骸は崩れ落ちそうだ。

良平は裕彦の手を引っ張り、無理やり連れて行くこうとした。

裕彦はいやいやをし、抵抗した。

「聞き分けをよくしなさい！」

さもないと、加奈子の死が無駄になってしまう。

良平は心を鬼にした。裕彦を強引に引き摺り出す。

裕彦はぎゃあぎゃああと泣き喚いた。

良平はもう裕彦を説得しようとはしなかった。

ただただ力づくで引っ張るだけだ。

「お母さん!!」裕彦は泣き叫んだ。

良平の胸は潰れそうになった。

「大丈夫だ。お父さんを信じろ」

俺は幼い息子に嘘を吐いている。

裕彦は引き摺り出されまいと、ばたばたと手足を動かした。

「危ないからやめなさい!」良平は裕彦を厳しく叱った。

このままじゃ、一家全滅だ。

もし助けに行かなければ、あなただけは助かる。会社を出るときにひろみが言った言葉を思い出した。

駄目だ。そんな人生はあり得ない。

良平は全力で裕彦をずるずると引き摺った。

「お母さん!!」裕彦はおそらく屋根の一部であっ

たろう木材を掴んだ。

「ヒロ君、放すんだ！ 手を怪我けがしてしまおうぞ！」
だが、裕彦は泣きじゃくりながら、木材を握りしめている。

木材はささくれ立っており、薄暗がりの中で裕彦の手から血が流れているように見えた。

どうすればいい？ 大人が強引に幼児を引き摺り出すのが正しいのか？

あなた。

加奈子呼んだような気がした。

裕彦の命を助けて。身体からだと心の傷は後で癒いせればいいから。

良平は頷うなずいた。そして、全力で裕彦を引っ張った。

裕彦は絶叫した。

ざくざくと肉が裂けるような音がした。

ふっと裕彦が軽くなった。

良平は裕彦を自分の胸の辺りまで引き摺り出すと、そのまま抱き締め、後ろ向きに家の残骸から這はい出でようとした。

背中に重くて硬いものが落下してきた。

衝撃で息ができなくなった。

大丈夫だ。まだ動ける。骨が折れたかもしれないし、内臓が潰れたかもしれないが、まだ動ける。なんとか、裕彦を家から出すんだ。怪我のことを考えるのは、その後でいい。

喉のどの奥から何かがこみ上げてきた。生臭く鉄臭い。その場にべちゃりと吐き出した。

そして、さらに這い進む。

あと数十センチのところまで、家はがらがらと崩れ始めた。

良平は雄叫おたけびを上げると、裕彦を外ほうに放り出だし、自分もなんとか這い出そうとした。

凄まじい音に包まれると同時に太腿ふとももに激痛が走った。

良平はしばらく動けなかったが、はあはあと呼吸を繰り返し、顔を上げることができるようになった。

雨が降り続く灰色の空を背景に裕彦が震えていた。

よかった。裕彦は無事だ。一家全滅にはならない。

良平は身体を動かそうとした。激痛が走った。もはやどこが痛いのかすらわからなかった。

なんとか背後を振り返ると、家は完全に崩れ落ちていた。瓦礫が良平の両脚の上に載っている。

裕彦が泣きながら近付いてきた。

「駄目だ。こっちに来ちゃ駄目だ。遠くに逃げなさい」良平は必死に言った。喉の奥からまた何かがこみ上げてきた。

「お母さん！」裕彦は瓦礫の中を覗き込んだ。

「何度言えばわかるんだ。逃げるんだ。そして、誰か大人の人を探すんだ。その人に助けて貰いなさい」

だが、裕彦はその場で泣き続けていた。

無理もない。まだこの子は五歳なのだ。自力で避難などできなくて当然だ。だからこそ、加奈子は自分の命を投げ出して、この子を守った。

そして、今この子を守ってやれるのは俺だけだ。良平は両脚に力を込めた。

びくりとも動かない。

闇雲やみくもに動こうとしても駄目だ。よく見て考えるんだ。

良平は背後を見た。

右脚の方がまだ載っている瓦礫の量が少なそうだった。

今度は両脚ではなく、右脚だけに渾身こんしんの力を込めた。

ごきりという音がして、脚が少し動いた。

折れたのかもしれないと思ったが、そのまま力を抜かず、ごりごりと動かし続けると、瓦礫の中からすっぽりと右脚が抜けた。

と、同時に瓦礫のバランスが崩れたのか、さらにながらりと崩れ始めた。

一瞬、左脚に掛かっていた荷重がなくなった。

その瞬間、良平は両腕に力を込め、両脚を瓦礫の中から引き出した。

直後、瓦礫は完全に崩落し、良平と裕彦が通った隙間すきまは消滅していた。

良平は肩で息をし、額の汗を拭ぬぐい、ごほごほと

咳せきをした。

口を手で拭うと血は出ていたが、出血はそれほど酷ひどくはなさそうだった。

両脚を動かしてみた。こちらもそれほど痛くはない。しかし、痺しびれたような感覚だった。

立てるだろうか？

不安を覚えたが、ゆっくりと立ち上がってみた。大丈夫だ。骨折も脱臼だつきゆうもしていない。

一歩踏み出すと、脱力して倒れそうになったが、なんとか踏ん張れた。

この分なら歩けそうだ。

避難しなければ。だが、どこへ？

良平は周囲を見渡した。

壊れていない家も何軒かはあった。

良平はとりあえず、助けを求めようと、その中の一軒に近付いた。

「ごめん下さい。誰かいませんか？」

返事はなかった。

よく見ると、二階の窓の辺りまで泥のようなものが付いていた。雨で流されていない所を見ると、

水が引いてからそれほど時間は経っていないようだ。

良平たちの家は土台から引き剥がされ、水に浮いたため、却って内部まで浸水しなかったのかもしれない。そのまま瓦礫でできた山に乗り上げる形になり、次々とぶつかってきた他の家に押し潰されたのだ。

おそらくこの付近にはもう住民は残っていないだろう。とりあえず、避難所に行くしかない。とは言っても、どこに避難所があるのかすらわからない。まずは土石流の被害のなかった高台に行くしかないだろう。

「ヒロ君、歩けるかい」良平は裕彦に呼び掛けた。裕彦はぬかるみに座り込んで、まだしくしくと泣いていた。

良平は裕彦の肩に手を置いた。「心配しなくても大丈夫だよ」

裕彦は顔を上げた。

「お母さんは……きつと後で家の中から出してあげるから？」

「えっ?」

「お母さんのことを心配しているんだろ?」

「お母さん?」裕彦はしゃくり上げながら言った。

「そうだ。お母さんが心配なんだろう?」

裕彦は不思議そうな顔をして、誰もいない空間を見詰めた。

「きつと後でお母さんを……」良平は言葉を詰まらせた。

「大丈夫だよ」裕彦は涙を拭った。

「えっ?」

「お母さんは大丈夫だって」まだ泣き顔だが、なんとか喋ることはできるようになったようだ。

どきりとした。

良平は裕彦の顔を見据えた。「誰が大丈夫って

言ったんだい?」

「お母さんだよ」

この子は母親が亡くなったことを受け入れられないのかもしれない。それは当然の反応だろう。しかし……。

「お母さんはまだお家の中だ」良平は家の残骸を

指差した。「覚えているかい？」

裕彦は頷いた。

「だったら、お母さんはここにはいない。わかるね？」

裕彦はまた空間を見た。そして、その後、良平を見た。

「お父さんはここにいるの？」

「ああ。お父さんはここにいるよ」

「お父さんはここにいるって」裕彦は誰に言うともなく言った。

「裕彦、誰と話してるんだ？」

「ここにはいないって」裕彦は良平に言った。

「何のことだい？」

「お父さんはここにはいないって」

「誰が言ってるんだ？」

「お母さん」

どういうことだろう？ 単に母親の死が受け入れられないというだけのことなのだろうか？

良平は迷った。

今、ここで母親はすでに死んでしまったのだと

いうことを良平に納得させることは正しいことなのだろうか？ それとも、逆に死んでしまった母親を生きっていると錯覚させることが正しいことなのだろうか？

ついさつき、良平は死んだ妻の言葉を受け取ったような気がしていた。

霊の世界があるのかどうかはわからない。あれは俺の心の中の声なのかもしれない。

いずれにしても、俺に起こったことが裕彦に起こったとしても不思議ではない。おそらく彼もまた加奈子の言葉を受け取ったのだ。

「お母さんの声が聞こえたんだね」

「うん」

「お母さん、何だって？」

「……お父さんの声が聞こえるの？ って」

良平は混乱した。

「どういうことだ？」

「お父さんが、どういうこと？ って」裕彦は空間に向かって言った。

「ヒロ君、何を言ってるんだ？」

「お母さん、泣いちゃった」

「お母さんが泣いた……」

加奈子があの世で悲しんでいるというのだろうか？ でも、どうして裕彦はそんなことを想像したんだらうか？

大きな自然災害が起きた後は、オカルト話が流行するという。しかし、たいていは、数か月から数年経って、事態が落ち着いてからだ。

災害から数年経った後、体験者は語り始める。実は、あの日、こんな不思議なことがあったんだよ、と。

災害の直後は大変過ぎて語る余裕がないという考え方もできるし、年月が災害の苦しみを怪談という形で昇華してくれるのかもしれない。

ただ、現在の目の前の息子の言動は単なる怪談とも違うような気がする。裕彦は現状を受け止めて、それを怪談として再構築している訳ではなさそうだった。ただ、自分の体験を言葉として発しているだけのようには思える。

母親の死によって、突然途切れてしまった今ま

での平穏な生活を継続させようとして、脳が幻の母親を作り出しているのだろうか？ それにしても、加奈子がなくなってからまだ僅かな時間しか経っていない。母親を失って何日も経った訳でもないのに、そんな反応が起こるものなのだろうか？

いや。今、そんなことを分析していても仕方がない。今日はいろいろなことがあり過ぎた。俺自身もまだ混乱している最中だ。裕彦の言動もこのような状況下では普通のことなのかもしれない。心の心配は後でもいい。今大事なのは、この状況下で生き延びることだ。

「ヒロ君、よく聞くんだ」

裕彦は良平の顔を見た。そして、また空間を見た。

良平はその行動の意味を確認しそうになるのをなんとか思い止おもまった。

幼い子にこれ以上のストレスを与えても仕方がない。

「これから避難所に行こうと思う」

「避難所？」

「家がなくなった人たちが集まるところだよ」

「どこにあるの？」

「お父さんにもまだわからない。だけど、探せばすぐ見付かると思う。だけど、少し歩かなければならないかもしれない」

「どのぐらい？」

「そうだな。たぶん一時間かそこらだと思う」

「一時間？」

「ええと……夕方までには着くと思うよ」

「夕方までには避難所に着くんだって」裕彦は復唱するように言った。

良平は裕彦が何かに伝えているのを辛抱強く待った。

「それがいいって」裕彦は言った。

「何がいいって？」

「避難所に行くの。いい考えだって」

「お母さんも避難所に行く方がいいって言ってるのかい？」

「うん」

「よし、じゃあ、二人で行こう」

「三人だよ」

「そうだね。三人だね」

良平は裕彦の手を握って歩き始めた。

裕彦はもう一方の手も何かを握るように突き出していた。

スマホが鳴った。

加奈子は取り出して画面を見た。

やだ。避難勧告だわ。でも、避難勧告ってどういう意味？ 避難しなくちゃいけないの？ しなくていいの？

一応避難の準備だけはしておいた方がいいのかもしれないわね。でも、どこに避難すればいいのかしら？

ここに引越してきてまだ数週間しか経ってない。今まで単身赴任だった夫の勤務先の近くに新居を構えたのだ。

引越す前の仕事は悩んだ末、辞めることにした。二年ほどの間、別々に暮らしていたのだが、息子の裕彦が小さいうちは、やはり家族一緒に住んだ方がいいという結論で、加奈子はこちらで新しい仕事を探すことにしたのだ。

夫の良平の方が仕事を辞めて戻ってくるという

選択肢も考えたが、大企業である良平の勤め先の方が福利厚生が良かったため、転職は加奈子の方がすることになった。裕彦の幼稚園も良平の勤め先の^{あつせん}幹旋もあつてすぐに決まった。

今は、新しい仕事を探すのに忙しい日々が続いている。

今日は、朝早く幼稚園から、大雨・洪水警報が出たので休園にするとの連絡が来た。

職探しに行く予定だったが、大雨の中、裕彦を一人で家の中に放っておく訳にもいかず、朝からずっと二人で家の中にいた。

そんなときの避難勧告だ。

外を見ると、バケツをひっくり返したような大雨だ。

この辺って浸水したりするのかしら？

持家ではなく、借家だったこともあって、新居の場所については、あまり気にしていなかったのだ。土地が高いか低いかさえ、わからない。

加奈子はスマホに周辺の地図を表示させた。

指を使って表示範囲を変えると、川が画面に入

ってきた。

あら、川なんてあったのね。

加奈子はこのとき初めて周辺の地形に気付いたのだ。

距離を調べると、どうやら堤防から百メートルもないようだ。

川が氾濫するはんらんことなんてあるのかしら？

念のため、加奈子は付近の避難所を調べた。すぐ近くの小学校がそうらしい。だが、川からの距離はこの家とあまり変わらない。この大雨の中、わざわざ子供連れで行く意味はあまりないような気がした。

家の中にいた方がよさそうね。まさか、洪水なんか起こらないでしょうし。

裕彦は居間で独りブロックを使って遊んでいる。退屈はしていないようだ。

ぐずり出すと大変だから、今のうちにできる家事はやっておいた方がいいわね。と言っても、洗濯はできないし、早目に夕食の用意をしておこうかしら？

台所に向かい、鍋なべを置き、コンロの火を付ける。スマホから電話の呼び出し音が鳴ったが、手が離せなかったので、留守番電話に切り替わるのに任せた。ぐつぐつと沸騰し始めたとき、居間に置いてあったスマホがけたたましく鳴り始めた。

裕彦も驚いてスマホの方を見ている。

何？ 音、大き過ぎるんじゃない？

加奈子は居間に戻り、スマホの画面を見た。

緊急地震速報！

加奈子は一瞬硬直した。何から始めればいいのかわからなかったのだ。

台所の方を見た。

鍋が火に掛かっている。

火を消しに行かなくっちゃ。

台所に向けて、一歩足を進めたところで、思い止まる。

待って、慌てて鍋のところに行った瞬間に揺れ出したら、熱湯を被かぶってしまうかもしれないわ。

今、火にかけているのは油じゃない。零こぼれても大事にはならないはず。それに激しい揺れがあった

ときは自動的にガスは止まるんじゃないか？

火を止めるのは後でもいい。今しなければなら
ないのは、裕彦と自分の身の安全確保よ。

加奈子は裕彦の元に駆け付け、抱き上げた。

「地震が来るの。テーブルの下に行きましょう」
怯えさせないようにできるだけ、優しい調子で言
う。

だが、ぐずぐずしてはいられない。加奈子は裕
彦と共にテーブルの下に滑り込んだ。

裕彦がもぞもぞと動いた。

「駄目、ヒロ君、もう少しだけじっとしていて」
自分の呼吸音だけが聞こえる。

来ない。ひよっとして誤報？ 誤報なら誤報で
いいわ。二、三分待って何も起こらなかつたら、
テレビを点けて確認してみよう。

揺れ始めた。

裕彦を抱き締める。

「大丈夫。すぐ止まるわ」裕彦を励ましているよ
うで自分に言い聞かせている。

裕彦は事態を把握していないだろう。

がたがたと揺れが激しくなる。

だけど、たいしたことはないわ。このまま収まりそう。

どん。

テーブルと共に二人は跳ねあがった。

がんがんがんがんがん。

テーブルも椅子もダンスを始めたかのようだった。台所からは吊り下げた鍋類が激しく壁にぶつかる音が聞こえた。

加奈子はテーブルの脚を押さえようかと思ったが、それでは裕彦の身の安全が確保できないと気が付き、テーブルは放置することにした。そして、そのまま裕彦に覆い被さる。顔だけを上げて周囲の様子を観察する。

テーブルは踊り続けている。あらゆるものが棚から落ちた。隣の部屋から大きな音がした。たんたんスが倒れたのだろう。起こすのはきつと大変だ。

せっかく、引っ越しの荷物を納めたばかりだっ

たのに。

加奈子は落胆した。だが、そんなことより今は命を守ることが優先だ。まだ、事態は全く収束していない。

壁から煙のようなものが噴き出した。壁が崩れ始めているようだ。同時に天井からぱらぱらと何かの破片のようなものが落ちてきた。

やだ。家が壊れかけている。このままここにもいいのかしら？

家の下敷きになるのはごめんだ。だが、地震が収まっていないのに、外に出ていくことが賢明な行動なのかどうかは判断できなかった。

窓までの距離はほんの二メートル程だ。でも、この揺れの中、窓を開ける動作ができるかしら？
そして、裕彦を連れて安全に外に出ることは？

激しい揺れの中ではなかなか考えがまとまらない。こういうときには下手に動かない方がいいわ。家が倒壊すると決まった訳じゃない。倒壊しても、きつとこのテーブルが守ってくれるわ。

ぱりぱりぱりという音が頭上から聞こえてきた。

音の大きさからして、単に天井が裂けただけとは思えなかった。きっと梁はりが折れたのだ。となると、いよいよ危ないかもしれない。

裕彦を強く抱き締めた。

目の前に良平の顔が浮かび上がった。

もう夫には会うことがないんだろうかと思った。

ごんという激しい音がした。テーブルに何かは落下したようだった。同時にテーブルの四本の脚のうち二本が折れて、弾はじけ飛とんだ。天板が斜めになった。夥おびただしい数の木材の破片が凄まじい勢いで落下している。周囲どちらの方向からも木の破壊される激しい音が鳴り響き、耳がどうにかなりそうだった。

裕彦は泣き出したようだが、その声すらも聞こえない。

窓の前にも木材の破片が降り積もり、一瞬で覆い尽くされてしまった。

加奈子は絶叫した。

周囲をがらがらと大量の物体が流れ落ちていくのを感じた。

たぶん今できることは何も無い。ただ、歯を食いしばって耐えるのよ。

気が付くと、揺れは収まっているようだった。

だが、身体が震えているので、本当に揺れていないかどうかは自信がなかった。

裕彦はまだ泣いている。ということは無事なのだ。

家の中は真っ暗だったが、崩壊は止まったようだった。

さて、どうすればいいのかしら？

加奈子は深呼吸した。埃ほこりを吸いこんでごほごほと咽むせた。

家の中に留まるのがいいか、外に這い出るのがいいのか？

家の中にいると、さらに崩壊が発生して、生き埋めになってしまうかもしれないし、火事が起きて焼かれてしまうかもしれない。

一方、無理に外に出ようとすると、それが新たな崩壊を招くかもしれない。

ここにじっとしていて、すぐ助けが来る可能性

はあるかしら？　これは相当大的な地震だったから、救助体制が整うには相当な時間が掛かるはずだわ。だったら、多少の危険は冒しても自力で出た方がいいかもしれないわ。

加奈子は周囲の様子を探った。

手にスマホが触れた。偶然、近くに落ちたらしい。

手探りで側面のボタンを押すと、ディスプレイが点灯した。

加奈子たちはテーブルの天板と壁で作られた三角ゾーンの中にいるらしかった。倒壊した家の中で助かった人たちの多くはこういう三角ゾーンの中にいたというのを聞いたことがある。ただし、どこに三角ゾーンができるかの予測は難しいので、意図的に三角ゾーンを利用することはまずできない。

とにかく自分たちは幸運だったと思った。

加奈子は裕彦を三角ゾーンに置いて、そろそろと上半身だけ這い出した。居間には家具と崩壊した建材が混在していた。それらは数十センチから

大きいもので一メートル以上あり、その中を進むのは大変そうだった。しかし、天井は大きく傾き、今にも崩れ落ちそうだった。

やっぱり外に出るしかないみたい。

「ヒロ君、お母さんの言うことをよく聞いて」加奈子は三角ゾーンに戻ると、裕彦に言った。

裕彦は泣きながら頷いた。

「地震でお家が壊れかけているの。このままここにいたら、押し潰されちゃうかもしれないの」

裕彦を怖がらせたくはなかったが、ここは真実を言おうと思った。

「怖い……」

「そうね。お母さんも怖いわ。でも、潰されないために、お家から出て行かなくちゃいけないの。だけど、慌てて動いたら、何かにぶつかって、家がすぐに壊れてしまうかもしれない。だから、ゆっくりと出て行かなくちゃいけないの。わかる？」

裕彦は泣き続けていた。

「ヒロ君、答えなさい。お母さんの言うことがわかった？」

裕彦は頷いた。

「じゃあ、お母さんにくっ付いてきて」

加奈子は中腰のまま、そろそろと歩き出した。

一步毎ひととに何か足の下で壊れる音がした。

大丈夫。何も起きない。このまま、外まで出られるわ。

再びがたがたと家全体が揺れた。

余震？

揺れは数十秒で収まった。

加奈子はまたそろそろと歩き出す。

裕彦は泣きながら、加奈子にくっ付いてくる。

そのとき、人の声のようなものが聞こえた。肉声ではなく、スピーカーを通していうようだ。

何を言ってるの？ 重要なこと？

「……命を守る行動をとってください。たった今、……ダムが決壊……まもなく……到達すると予測……命を守る行動をとってください」

命を守るための行動はさつきからずっととっているのに、この上、何をどうしろというのかしら？ まあ、いいわ。とにかくこの家から出るこ

とが最優先よ。放送内容の吟味はその後で充分だわ。

加奈子と裕彦は慎重に進んだ。あと僅かで窓に届きそうだ。ガラスはすでに割れてなくなっている。そのまま出ればいい。まずは裕彦を外に出して、わたしはその後で出よう。

聞いたことのない音が聞こえた。どこから聞こえてくるのかわからない。とにかく大音量のノイズのような音だった。

ひよっとすると、今度は大きな余震が来るのかもしれないわ。でも、今は退避行動を続けるしかない。

窓枠に手が触れた。

家全体がぐらりと揺れた。あらゆるものが床の上を滑り、ぎしぎしと擦れ合う音がした。

余震？

顔に飛沫が掛かった。

窓の外に水が流れていた。

津波？ そんなはずはない。ここは海から遠く離れている。でも、さつき放送でダムがどうかし

たと言ってたわ。ということは洪水が起こってるのね。

加奈子は必死で考えた。家から出た方がいいのか出ない方がいいのか？

洪水の規模にもよるが、家の中でじっとしていたら、水位が上がって溺れてしまうかもしれない。まず外に出て高い建物に逃げ込むのが良さそうだわ。

「ヒロ君、先に外に出て頂戴ちようだい」

「水が来てる」

「大丈夫。お母さんもすぐに出るから」加奈子は嫌がる裕彦を抱えると、窓の外に下ろした。

思いの外、水位は高く、裕彦の腹の辺りにまで来ていた。

加奈子は焦った。

こんなに水が来ているとは思わなかった。急がなくていい。

窓枠を跨またごうとしたが、焦ったため、手が滑り、家の中に落下してしまった。慌てて立ち上がろうとすると、今度は家がぐらりと大きく揺れた。

もう慎重に動いている場合じゃない。

加奈子は飛び起きると、窓枠を飛び越えようとした。

窓の外に裕彦の姿はなかった。凄まじい勢いで水が流れている。

「ヒロ君！」加奈子は水の中に飛び込んだ。

足が付かない。

家の方を振り返ると、家自体が流されていることに気付いた。

裕彦の姿は見えない。

加奈子は水の中に潜った。だが、水が濁っているため、何も見えなかった。

「ヒロ君！」

返事はない。

加奈子は斜めになった家の外壁に攀じ登った。少しでも高い場所から周囲を見渡そうと思ったのだ。

二十メートル程離れた場所に服のような影が見えた。水面のすぐ下のようにだ。

すぐに水に飛び込む。加奈子は水泳が得意な方

ではなかったが、なんとかじたばたと影の方に進んだ。

それはやはり裕彦だった。ぐったりとして、全く反応がない。

加奈子は気付いていなかったが、このとき裕彦の意識がなくなっていたのは、彼女にとって幸いだった。もし意識があったなら、裕彦は加奈子にしがみ付くことになり、二人とも溺れていただろう。

加奈子は裕彦の顔を水の中から引き上げた。だが、意識は戻らない。

加奈子は今までの人生でこれほどの恐怖を感じたことはなかった。全身ががくがくと震え、どうしても止まらない。

「助けて!!」加奈子は自分も半ば溺れ、水を飲みながら叫んだ。「誰か、この子を助けて!!」

だが、返事はなかった。

加奈子は裕彦の口に顔を近付け、呼吸音を確認しようとしたが、雨と水の音が大き過ぎて、よくわからなかった。

低酸素脳症に陥ると、数分で脳に障害が起こる。そして、もし心肺停止していたなら、十分程度で死に至る。猶予はない。

加奈子は家の方を見た。

相当離れている。そして、こうしている今もさらに離れていくのがわかる。水に流されているのだ。

加奈子は裕彦を抱えたまま懸命に泳いだ。だが、全く進まず、距離は開くばかりだった。

駄目だわ。家に戻ろうとしても無駄だわ。どこか別の場所に向かわないと……。

加奈子は何か掴まれる場所はないかと、振り向いた。

目の前に瓦礫の山が迫っていた。

もう一瞬、気付くのが遅かったら、加奈子は対応できずに、そのまま流され続けたかもしれない。だが、幸運なことに傍そばを通り過ぎる直前にその存在に気付いていたため、なんとか瓦礫の端を掴むことができた。それは非常に不安定で、がたがたと揺れたが、加奈子は懸命に這い上った。右手は

裕彦を抱えているため、上るのに使えるのは、左手だけになる。何度か滑り落ちそうになったが、気が付くと、全身が水面から出ていた。

水流の勢いがやや落ちてきたため、流されてきた瓦礫が取り残され、それが集積し、高さ二、三メートルの一時的な山を作ったようだ。様々な瓦礫の集積体なので、いつ崩壊するかわからないが、今はこの場所に頼るしかない。

加奈子はできるだけ高い場所に裕彦を仰向けあおむに横たえた。

どうするんだっけ？

まずマウス・トゥ・マウスで、空気を送り込もうとしたが、うまくいかない。空気が肺にまで届いていないようだ。

そう言えばテレビで、最近は人工呼吸より心臓マッサージを優先するとか言ってたような気がするわ。

加奈子は裕彦の胸を強く押さえた。

口から少し水が出た。

肺の中に水が？

加奈子は裕彦をいったん横向きにして水を吐かせてから、もう一度仰向けにし、胸を押さえた。

裕彦は再び水を吐くと共に、咽だした。

「よかった！ 生きているのね！」加奈子は喜びのあまり、その場にへたり込んでしまった。

裕彦は激しく咳せき込み、そして震え出した。

「寒いの？」加奈子は尋ねた。

だが、裕彦はぼんやりと遠くを見詰めるだけで、返事をしない。

たぶんショック状態なんだわ。

「動ける？」

裕彦に反応はない。

加奈子は裕彦を立たせてみた。

なんなく立ち上がる。だが、ぼんやりとしていて、声を掛けても返事はない。

加奈子は不安になったが、とりあえず今は生き延びることが優先だ。

少し高い場所からもう一度周囲の状態を確認した。

さっきは随分遠く見えたが、自宅はほんの三、

四十メートル先にあった。近くに何軒も他の家があり、それぞれがゆっくりと移動しているように見えた。

土台からもぎ取られた家が集団で流されてるんだわ。

水への抵抗や浮力の違いからか、それぞれの家が流される速度はばらばらだった。今、一軒の家が加奈子たちの自宅にぶつかった。激しい音を立てて、家が崩壊する。

加奈子はただ呆然と見詰めた。あまりにいろいろなことが起きたため、自宅が潰れるのを見ても、もはやさほど心は動かなかったのだ。

どうせ借家だしね。でも、家財道具は勿体ないかも。きつと殆ど流れてしまったわ。

二つの家はひと塊となり、さらに別の家にもぶつかった。自宅は二つの家に挟まれる形になり、ぐしゃりと潰された。

もしあの家の中にいたらと思うとぞっとした。

加奈子はしばらく瓦礫の山の上で時間を過ごした。ここで救助を待つしかない。身体が濡れて体

温が奪われるのが心配だが、今はどうしようもない。裕彦を抱き寄せ、互いの体温で少しでも冷えるのを防ごうとした。

良平はどうしているだろうかと思った。さっき見た地図によると、良平の職場はここより下流だ。だから、水流も弱まっていて、きっと無事だ。たぶん今頃はもうこっちに向かってきているはずよ。

加奈子は自分の心にそう言い聞かせた。

やがて、徐々に水が引き出した。まだ膝ひざぐらいまではありそうだが、殆どが泥で人間が流されるような状態ではない。

加奈子は自宅の中がどうなっているか、確認することにした。電化製品は絶望的だと思ったが、ひよっとすると金庫は無事かもしれない。預金通帳や印鑑が残っていれば、結構助かるだろう。

ただ、子連れで家の中を覗くのは危険かもしれない。加奈子は少し迷ってから、裕彦をここで待たせておくことにした。おそらくもう大きな危険はないと思ったのだ。

「お母さんは家の方を見てくるから、ヒロ君はこ

こで待っていて」加奈子は家の方に向かった。

家の中は酷い有り様だった。と言っても、見えたのは入り口からすぐのところだけだ。奥の方は真っ暗で何も見えない。

この中に入るのは止めた方が良さそうね。きっと事態が落ち着けば重機が運び込まれるだろうから、金庫の確認はそれまで待つことにしよう。

加奈子は瓦礫の山の方に戻ろうとした。

裕彦の姿が見えない。

「ヒロ君！」加奈子は駆け出そうとした。

そのとき、裕彦が家のすぐ傍そばにいることに気付いた。どうやら知らない間についてきたらしい。

「駄目じゃないの、ヒロ君。待っていてって言うたでしょ」

裕彦は泣いていた。

「お母さん！」

「どうしたの?」

加奈子は裕彦の手から血が流れているのに気付いた。

いつの間に怪我をしたのかしら? でも、今は

手当てができない。せめて綺麗きれいな水があれば……。

裕彦は泥濘ぬかるみの中に座り込んでいた。

「えっ？」突然、裕彦が言った。

「どうしたの？」

「お母さん？」裕彦は不安そうに加奈子の顔を見た。

「どうしたの、お母さんがわからないの？ 大丈夫。お母さんはここにいるわ」

すると、裕彦は誰もいない方を向いた。「大丈夫だよ」裕彦は涙を拭った。

「どうしたの？ 誰と喋ってるの？」加奈子は嫌な予感がした。

「お母さんは大丈夫だって」裕彦は空間に向かって話している。

加奈子はぞっとした。

裕彦は良平と喋っている。そう実感したのだ。

あの人は息子のことが気掛かりで、霊になってここまで帰ってきたんだわ。……いいえ。まさか。きつとあの人は無事よ。そうに決まっている。

「お母さんだよ」裕彦はまだ空間に向かって喋り

続けて、頷いている。

訊きいたら取り返しがつかないことになりそうな気がする。だが、訊かずにいることはできなかつた。

「ヒロ君、お父さんは……お父さんはここにいるの?」

裕彦は少し困った顔をした後、空間に向かって言った。「お父さんはここにいるの?」

加奈子は後悔した。訊いてはいけないことを訊いてしまった。このまま裕彦の心に蓋ふたをしておくべきだったかもしれない。

「お父さんはここにいてるって」裕彦は屈託なく答えた。

裕彦の言葉を認めたい一方で認めたくない気持ちもあり、加奈子は葛藤かつとうした。

良平がこの災害で命を落としていたとしても、おかしくはない。だが、そんなことは簡単には認めたくない。良平の身に何かあったという根拠は何一つないのだ。一方で、良平の死などという発想が全くないはずの裕彦に良平の姿が見えている

ことが気になった。もしかしたら、本当にそこに良平がいるのかもしれない。

加奈子は首を振った。

そんなことは認められない。

「ヒロ君、よく聞いて。それは気のせいなのよ。

お父さんはここにはいないの」

「ここにはいないって」裕彦は空間に言った。

「お父さんはここにはいないって」

幻に向かって、あなたは存在しないと書いているんだらうか？ もし大人がやっているとしたら、滑稽こっけいなコントに見えたかもしれない。

「お母さん」裕彦は言った。

幻に何かを訊かれたようだ。

加奈子は迷った。

裕彦にそれは幻でお父さんはきつとすぐに見付かるよ、と言うべきかしら？ だが、それは気休めに過ぎない。良平の消息は全くわからない。裕彦は心細いのだ。だから、幻であっても、父親が必要なのかもしれない。

「ヒロ君、お父さんの声が聞こえるの？」

「うん」裕彦は加奈子に答えたのか、それとも幻に答えたのかわからなかった。

「……お父さんの声が聞こえるの？　って」裕彦は空間に言った。

加奈子は裕彦の反応を待つことにした。

「お父さんが、どういうこと？　って」裕彦は加奈子の方を見た。

加奈子は実感した。そこに良平はいる。それはつまり……。

「お母さん、泣いちゃった」裕彦は空間に報告した。